
0 1

NiCo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

0
1

【ZINE】

Z1539Z

【作者名】

NiCO

【あらすじ】

零式オリ主がONE PIECEの世界にトリップ。（原作知識、その他なし）

主人公は家族第一主義

エースの兄貴分にしたくて書いた、始めての小説なので続くかはわからない。

現在子供時代

作者のハートはお豆腐

プロローグ1（前書き）

衝動的にはじめてしまったoren

続くところまで頑張ります。

零式のネタばらが微妙？おもいつきり？含まれます、未クリアで零式をクリアしてやるぜ！という方は読まないのをお勧めします。

・・・おく？

プロローグ1

壁が壊れ瓦礫が散らばる中、エース達は意識が薄れていくのがわかつた。命を賭した戦いにおいてからうじて勝利をもぎ取る事が出来たが、戦いながら自分達はもう帰る事が出来ないとわかつていた、いやわかつてしまっていた。

意識が薄れながらも教室の前に集まり手をつないだ、死ぬ事が怖くないと言つたら嘘にはなるがさつきまでの足下から這い寄る虚無感は自ずとなくなつっていた。

「最後に…会いたかったな…。」

視界も定かでなくなつてきた中、エースがぽつりと零した。

エースたちはそれが誰をさしているのか名前を言われなくともわかつっていた。最後の戦いになる前にフラリと姿を消してしまった自分たちの兄貴分のことだ。ルルサスの戦士に怯えて逃げ出した等といふ言われない侮蔑の言葉を吐く輩もいたがあの人人がそんな事をするはずがないのは、エース達が一番わかつていた。ならば何処にと問われてもエース達にもわからない、心残りと言えばあの人人の無事がわからない事だった。

大きな音を立てて扉が無理矢理開けられた、エース達は力なくそちらに視線を向けるが霞む視界のせいで人が立っているという事しかわからない。

「エース！」

その人影が大きな声で名前を呼ぶ、その声色には心配と恐怖の色がありありとにじみ出ていた。

「…兄…さん…・・・？」

エースはその声の持ち主が誰だかよく知っていた。思わず安堵のため息が出そうになるが、一刻一刻と近づいてくる死がそれすらも許さないまでに体力を削っていた。

「…絶対に助けてやるから…。」

兄貴分の力強い声が耳に届く。

それとほぼ同時にエースの眼に鮮烈な赤い光が突き刺さり、ほほに暖かいものが付いたのがわかつた、戦場を歩いてきたエースにはそれが何なのか見えずともわかる。

「兄…さん…・・・!？」

自分の前には兄がいて、頬に飛んだ此れは誰のものだか考えずともわかる。

思わず声を強くしてしまうが、言い終わる前にエース達を熱風が襲つた、周りにある瓦礫が熱に耐えきれずに砕け、蒸発していく音がわかる、だがなぜ自分達が平氣なのかがわからない。

視界を埋め尽くす炎が消えていき視界が開けていく、あまりの出来事に呆然としていたが自分達の体が軽く、眼が普段道理に見えていたことに気付き、自分達の兄がこの不思議な現象が起きる前に言った言葉を思い出し兄のした事だというのはわかつたが何をしたのかがわからず、自分の手を見て呆然としてしまった。

「兄貴！」

ナインの怯えたような声が聞こえ眼をやると血溜まりに膝を付き体中に傷を負った兄がいた。

致命傷は明らかに胸に深く刺さったナイフだとわかる、デュースやクイーンが駆け寄りケアルを掛けているがもう助からないのが眼に見えていた。

「兄さん……？」

思わず涙声になってしまつ。

「おう……、大丈夫か……？ エース……？」

もう眼が見えていないのか視線があらぬ方向に向いている。駆け寄り手を握りながらケアルを魔力の限り掛けるが血は止まらずにエースの手を汚していく。

失われていく兄の体温、「こいつした力強い手から力が抜けていくのが耐えられずにエースの眼から涙がこぼれる。

「兄さん……なんで……！？」

嗚咽まじりに兄に疑問を叩き付けるが、兄が答えられないのはわかつており、兄がなぜこのような事をしたのかも予想がついていた。

「生きて……くれよ……！」

兄の手がエースの手からはなれ血溜まりの中に落ちていくのがエースにはスローモーションのように見えた、それが兄がもう手の届かないところに言つてしまつたのを説明されたような気分になつてしまふ

「あ・・・」

びしゃりと血溜まりの中に手の甲が落ちる音と同時に兄の体が足下からクリスタルに浸食されてきている。

キングやサイスが兄から離そうと引っ張られながらも片手を伸ばすが、兄に届く事はなく兄はクリスタルの固まりとなつた。皆、兄の死が受け入れがたくうつむきながら涙を流すが、クリスタルが急に光りだすと兄であつたそれは澄んだ音を残し碎け散つた。

プロローグ1（後書き）

最後の砕ける云々はオリジナルです。

ワンピースの「字も出てこない・・・

どうこういとなの・・・おんな

プロローグ（前書き）

— | 話題です

プロローグ2

アルは自分が死んだことは理解していた、だが自分がなぜ意識があるのかが理解できない、弟達を助けるために命を掛けて軍神を呼んだはずだった。

アルが呼んだ軍神フェニックスは秘匿大軍神の片割れであったが彼の大決戦に使うには規模が小規模かつ攻撃力に欠けるという理由で使われなかつた軍神であつた。使用条件として召喚者の命を賭さなければいけないので使用する者がいなかつたのだが、アルはマザーから渡されていた。

「使う使わないはあなた自身が選びなさい、選ぶべき時は自ずとわかるはず。」

マザーの言葉が死に体の弟達を見たときに頭に浮かんだ。

朱雀クリスタルがルシを求めたとき、アルは呼びかけに答えていた、ただし力よりも弟達を守る力を求めたことによつて攻撃に関しては補正が少なくされてしまった。

その後急いで弟達と合流をしようとするが既に戦いは終わつてあり息絶える寸前の弟達がいるのみだった。

暗がりの中アルは目が覚めた、固い石の地面に無造作に横たわっているのはわかつたが自分で体を動かす事も出来ない、頭を動かし建物に囲まれた薄暗い路地裏という事はわかつたがここが朱雀領の何処なのかそれ以外の場所なのかわからなかつた。

明るい方からは喧騒が聞こえてきており人がいるという事はわかつたが、万が一白虎領であつた場合は眼も当てられないでの自分の体力が回復するのを待つしかなかつた。

眼をつむり混乱する頭を落ち着かせる、頭に浮かぶのは弟達のことだが自分の今際の際に泣きながら駆け寄ってきたのが記憶にあるので軍神の使用は上手くいったのであろうとあたりをつけた。

「（泣かせちまつたな…）」

泣かせたくなかった、笑つて欲しかつた相手に泣かれてしまったのがアルにわずかな罪悪感を残していた。

魔導院に引き取られたときにはまだ小さく自分がなぜ親元を離れここに来たのかわかつていらない様子で不安そうな瞳でこちらを見上げてきた。

アギト候補生になると決まつたときに武器の扱いを教えたのは自分で、小さな体に不釣り合いな大きな武器を振り回していた、弟達の才能は眼を見張る程で見る見るうちに自分を抜かした。

弟達との思い出を振り返つていてるうちに体が動かせるようになつてゐるのに気がついた

「よいしょつと」

地面に手をつたり立ち上ると、明るい方向へと歩を進めた。

「ローディー 海賊団船長、ローディー・ホルフマンの処刑を始める。」

男性の良くなれる声がアルの耳に届いたが、アルにはその内容がいち理解できなかつた

男がいう処刑という言葉も、処刑されるという海賊といふ言葉も何をさしているのかがわからなかつた。

しばらく路地裏から様子を伺つてみると大柄ながつしりとした髭面の男が手錠に繋がれながら白い制服を着た男二人につれられて広場にやつてきた、と同時に広場に集まつた者達が一斉に声を上げた。

「シネ！」「地獄に墮ちろ！」「早く殺せ！」

聞くに堪えない罵倒雜言とともに男に向かつてゴミや石等を投げつけていく、投げつけられている男は口答えする体力もないのか俯いたままそれらを受け入れている、それに気を良くしたのか広場は罵倒雜言で溢れ、投げつけられたもので男は額や至所で血を流し始める。

アルはその様子に背筋が寒くなつた、罵倒を浴びせる者達の顔は愉悦に口元が歪んでいた。しばらくその様子が続くと最初に号令をかけた男が片手を上げる、それを見た途端に民衆は大人しくなり耳が痛くなるような静寂が訪れた。

「ローディー・ホフマンの罪状を述べる。この平和な町の良き民達を怯えさせ、ピースメインであるという偽りを吐き町への侵入を試みた。

これは許されざる行為である、よつて死刑に処す異議のある者は申し出よ。」

静寂の中男の感情を感じさせない冷徹な声が響いた。

「死刑！」「死刑！」「死刑！」

民達は声高らかに死刑を望むこえをあげた。

「異議はなし、執行せよ。」

男は近くに控えていた制服姿の男達に命令を下す。

男達は海賊に首かせを付け階段を上らせる、民達の声がうるさい中アルには男の上の階段の軋む音が耳障りに耳にこびり付いてはなれなかつた。

階段を上りきるとそこには片刃の大きな鉄とそれを上部に付けられた門のようなものがあった、男を膝まづかせ首かせを固定すると民達の熱狂はピークへと達した、海賊の男はぐるりと青ざめた顔で広場を見渡すと唇を小さく動かした

「（ウランティヤル）」

男の眼とアルの眼が一瞬あつた気がした。

コードを羽織つた男が右手を振り下ろし制服の男の片方が刃を繋いでいるロープを切り落とした。

ドゾンと重い音を立てて男の首が落ちた、民衆はそれを面白いものを見たとばかりに口元に笑みを貼付け顔を赤く染めながら叫んでい、男はそれを満足そうに見回すと首を回収させ狂氣が渦巻いている広場に背を向けた。

アルには今日にした光景が信じられなかつた、あたかもショーように人の命を絶ちそれを甘んじて受け入れ狂喜する民衆、そして死者を忘れる事がないという事に気付き愕然とし、頭を抱え座り込んでしまつた。

しばらくへたり込んでいると、ふと男の頭を回収したのが気になつてしまつた

「レビゲート」

アルは浮遊呪文を唱え呪文がキチンと効力を發揮した事に安心しつつも急いで制服を着た男達の去つて行った方向へと民家の屋根を掛けに行つた。

プロローグ2（後書き）

FFの呪文が出てきました

最初の呪文が此れかよ…

またしても原作陣が出てきませんorz
このペースだといつになる事やら…・・・

プロローグ③（前書き）

残酷（？）描写がふくまれています？

もうすぐ大学一年生が終わってしまいます、この間入学したと思つたらはやいものだなー

プロローグ3

アルは屋根を駆け男達の後を追う、男達は首頭と尖った棒、そして大きな旗のようなものを持ちながら町の中心部からどんどんと早足で遠ざかつて行つた。

結局男達が足を止めたのは町の反対側に位置する砂浜、いや荒野といつていいような荒涼とした場所だった。見つかるとまずいと直感的に考えているアルは小声で呪文を唱えた。

「インビジ」

アルの姿が背景と同化していく。

透明と化したアルの耳に目的地に到着したのか命令を下す男の声が聞こえる、遠すぎる所以何を言つているのかはわからないが男達の行為と周りにあるものを見て愕然としてしまつた。

男達は海賊の首を棒の鋭利な先に刺すと其れを地面に突き刺し、旗をその棒に結びつけていたのだ、周りにあるものを見ると真新しいものから古く風化した頭蓋骨や破れかけた旗がはためいていた。

アルにはこのような死者を冒涜するような行為が信じられなかつた、薄々感じていたがこの世界は自分の知る世界ではないのだろう、知らない町並みに文化移動手段として発達しているらしい船、そして…死者を忘れないという事実。アルのいたオリエンスならばクリスタルの加護によって死者の記憶は一切合切消去される、があの男の顔を言葉を忘れる事が出来ていない、これが示すのはクリスタルの加護が存在していない世界であるという事だ。

其れを踏まえた上で目の前の行為はアルには信じられない程に残酷きわまりない事だつた、アルはまたしても気付かずへたり込んでしまつていた。この世界には自分の常識が通用しないことや不安だらけの場所に一人放り出されてしまつたのを悟つたからであつた。

アルは呆然としながら町の通りを歩いていた、一般市民の格好を見る限り深紅のマントを羽織っているのは怪しいというのは予想していたのでマントと上着は脱ぎ上は黒いタンクトップ一枚だがこの島は比較的温暖なため寒くはなかつた。アルには此れからどうすれば良いのか全くわからなかつた、金銭も常識も身寄りも身分もないアルはまさしく孤独だつたのだ。

町民が白い制服の男に相談をする場面を何度か見たがアルには相談する気にはなれなかつた、下手な事をして尋問、万が一にも処刑されてしまふという恐怖が拭いきれなかつた。

トボトボと歩いているアルに快活な声が掛けられる。

「お兄さんどうしたんだい！そんなしょぼくれた顔をして！」

恰幅のいい女性に店先から声を掛けられたあるは思わず体をかたくしてしまつた

「いや何も」

思わず曖昧な返事を返してしまつと女は訝しげに眉をひそめた

「? 本当にどうしたんだい？」

今度は心配の色をありありと滲ませながらアルに問いかける
逃げられないと悟つたアルは嘘をつく事に決めた

「いや、財布を落としてしまつてね。今一文無しなんだ、それでどうじょうつかと……」

アルは困った人の雰囲気を出せりと肩を落としながら覇氣のない声で答えた

「セリヤ あお氣の毒」…

女は眉の端をおとし同情の眼差しを向ける

「出来れば仕事に心当たりがあれば教えてもらいたいのだが…」

アルは出来るだけ丁寧な言葉遣いを意識して女に話す
女は悩んだ末に言葉を発した

「そんな余裕のあるところなんて無いと思うけど、もしかしたら海軍のところにや何か仕事があるかもしないよ、行ってみたらどうだい？」

アルは聞き覚えの無い軍隊に内心首を傾げるが疑問をお前にせよとすこし女に問いかける

「海軍にはどうやって行けば良いのかね？」

女はおかしなことを聞く男だと思しながらも丁寧に教えてやる

「あの大きな建物だよ、町の何処からでも見えるから道には迷わないはずだよ、わからなくなったら近くの奴に聞きな」

女の指刺す建物に目をやりアルは血が引いた、その建物に大きく印されるマークは制服を着た男達の帽子や胸元、羽織るコートに印されるのと同じ蒼い鳥が翼を広げているマークだったのだ。

アルは顔が青くならぬよう気にしつつの方へ向かなくなると
礼を言い足早にその場を去った。

この町にいても働く当てが無く野垂れ死ぬだけだとわかったアル
はこの町に見切りをつけ、顔を覚えられたり不審に思われないうち
に早々に町を出るべきだと考え歩を進めた。

プロローグ③（後書き）

ああ、原作が遠い…

いつたいいつになる事やら。

プロローグ4

町の中を歩いてみた限りこの世界には飛空艇や列車といつもの
移動手段として確立はしておらずほとんどの移動は帆船が主立つた
ものだといつのがわかった。

「（ビリするか）」

アルは今悩んでいた一文無しの自分が船に無償でのせてもらえる可
能性はゼロと言つていい、お金を稼ごうともどこに行つてもあの恰
幅の良い女とにたよくな答へが返つてくるだけだった。

「（仕方が無いか）」

さんざん考えたが良案は浮かんでこずただ突つ立つ立つても問題が
解決する訳でもないので、少々良心が痛むが強硬手段をとる事にし
た。

「インビジ

アルは物陰で姿を消すと日につけた商船りしき船へとテロップを上
り潜り込んだ。

アルは弟達の事が絡むと臆病な程に慎重になり物事を深く考えた
り悩んだりするのだが、自分だけの事に関しては驚く程に楽観的で
あつたり考え方の行動をする事があつたりする。今回は其れが裏
目に出てしまつた良い例だといえるだろう。

アルは早くも自分の短慮を後悔していた

「（き、気持ちわりい）」

帆船に乗った事がないアルは見事に船酔いになつて、乗つてしまはくは大丈夫だったのだが風が強くなり船が左右上下に激しく揺れ始め、アルの隠れる物置はまるでカクテルシェイカーのように揺れに揺れアルはあっけなくダウンしたのだつた。

アルは知る由もないのだがアルの乗る商船は嵐のど真ん中にいた、航海士の予想を上回る規模早さを持つ嵐に商船はもみくちゃにされておりこのままでは船の放棄も念頭に置かなければならない程に切羽詰まつていた。

アルはぐつたりしつつ耳に入る強い風の音に蒼龍との総力戦のことを思い出して、一時期押され気味になつっていたが候補生達の奮闘により勝利は目前と迫つていた蒼龍戦だったがルシ星姫に撤退を余儀なくされ下手をすれば負けてしまう所だつた、撤退の際に自分たちがあいて行かれ全滅というところにマザーの助けが無ければ大きな被害を朱雀軍に齎しているところだつた。その時の星姫に瀕死にされて行く弟達を前に無力な自分を思い出して物置の中アルは一人うなだれていた。

アルが物置にて回想に耽つているころ、船長はこの船を放棄することを決めていた。嵐の中船底にはすでに何ヵ所か漏水がひどくなつており沈むまで後一時間あるか無いかといったところであった、積み荷はあきらめる事になるが命の方が大事だと判断した船長は副船長他に避難命令を下した。

船員は逃げ遅れている者がいなか船の中を駆け回るが見当たらないと判断すると最後の避難船で船を後にした。

アルは世界を移動してから一睡もしていなかつた疲れが出てきたのか氣絶するかのように深い眠りの中に落ちていた。

「いつて！」

アルの頭に棚から落ちてきた荷物の角が直撃し言いがたい痛みに転げ回つているとふと不審に思った、眠りに落ちる前の忙しい足音や喧騒が聞こえず風の叩き付ける音や雨音しかきこえなかつたのだ、アルは自分にまだインビジの効果が続いている事を確認すると警戒しながら扉を開いた。

「うびわっ

扉を開いた途端に水が怒濤の様に押し寄せてアルは尻餅をついてしまつた

「つか、レビゲート」

びしょぬれになつてしまつたアルは舌打ちしつつも浮遊呪文を唱え廊下を警戒しつつ進んで行くが海水に浮かぶ木片や荷包みだけでひとつこ一人見当たらない、思わず眉をひそめるが止まる訳にもいかず甲板へと向かつた。

「なんじゅこりやー！」

アルは思わず声を荒げるが、風にかき消されてしまつ甲板にも人影は見当たらないのだが、帆は破けて荷物は散乱して雨は体を叩き付け波はときおり甲板に乗り上げてものを破壊して行く、アルは慌て

て船内に戻るがこれからどうすれば良いのか途方に暮れてしまう。

このままではどうしようもないと覚悟を決め甲板へと扉を開こうとした時船が大きく傾いた、船首が持ち上がり船は沈み始めたのだと船はゆがみ扉は開かなくなるが扉の隙間からは容赦なく水が流れ込んでくる

「ファイア！」

慌てて扉に火球をぶつけるが頑丈に出来ているのか表面が焦げてしまふにおわった

「ファイガ！」

先ほどの火球よりも何回りも大きな火球を放つ、アルは後ろと前から迫つてくる水と言う初めての状況に冷静さを失いかけていたのだ。放たれた火球は扉に炸裂し破壊には成功したがアルも炸裂した時の衝撃によって壁に激突し気を失う羽目になってしまった。

暗転する視界の中壊れた扉の向こうから押し寄せる水を最後にアルは意識を失った。

プロローグ4（後書き）

・・・」の後がいつか

魔法一覧（前書き）

使用した魔法を載せていきます

12 / 09 「ウォーター」を追加

12 / 10 「ヘイスト」を追加

12 / 11 「スロウ、デスペル」を追加

12 / 15 「ケアル・ケアルラ・ケアルガ」を追加

12 / 18 「武器生成」を追加

魔法一覧

インビジ

姿を景色と同化させ相手に認識させない魔法。

レビート

自分を浮かせる浮遊魔法、移動も出来る。

ヘイスト

自分の体感時間を引き延ばし、また体の反応速度等も早くする魔法。インビジや他の補助魔法と比べて効果の続く時間は短い。

スロウ

相手の体の進みを遅くする魔法、体感時間はいじらないので感覚と体の間にログが生じても悪質な魔法。複数を対象に出来るが効用時間や成功率が単体を対象にした場合よりも下がる。

デスペル

スロウ等の呪文の効果を消し去る、対の魔法としてエスナが存在する。

ケアル・ケアルラ・ケアルガ

アルの世界で一般的な回復魔法、ランクが上ると回復可能人数、

範囲、量が増える。

回復魔法として凡庸性は高いが瀕死の重体や心肺停止状態には利き辛い等の欠点もあり、レイズやアレイズとの平行した利用が望ましい。

ファイア・ファイガ

火球を飛ばす攻撃魔法。攻撃力や火球の大きさはランクが上がるごとにあがる（ファイア ファイラ ファイガ）。応用で火球をゆっくりと相手を追尾する炸裂弾にしたり、自分の回りに炸裂させ囲む敵をなぎ払つたりとの芸当も可能。

ウォーター

水を生み出す魔法、攻撃にも使えるがサバイバルにも使えるよう設計された。他の魔法より応用が利き相手を水球に閉じ込める等の芸当が可能ただしこの場合には相手が抵抗をすればすぐに水球がはじけてしまうのでサンダーや他の魔法との連携が主。ランクが上がると水量が増える。

攻撃魔法のタイプ

- | | |
|-------|----------------------------------|
| R F | ライフル
まっすぐ飛んで行く |
| S H G | ショットガン
前方に広がる近距離用、多段ヒットする |
| B O M | ボム
自分を中心周囲に炸裂させる |
| M I S | ミサイル
相手を追尾する |
| ROK | ロケットランチャー
好きな方向に発射出来、着弾点で炸裂する |

魔力で武器を作り出す、作り出した武器は本人にしか扱う事は出来ないが精神的摩耗も少なく何処にでも武器をもって行けるので便利。

プロローグ5

アルは幸運だった、ただし遭難した事をのぞけばだが。

アルは海の上を漂つていた、幸運な事にうつぶせではなく仰向けて、そしてレビデトの効果が続いたまま。つまり気絶したままであっても溺死する事も無かつたのだ、もしレビデトの効果が切れていたり仰向けであつた場合アルはあえなく溺死してしまつていただろう。

アルは手足が冷たいのに気がついた腕は手から肘あたりが足は膝位までが冷たかった、はつきりとしない頭で何があつたかを思い出していたが頭が全く動かない、ぼけっと見上げている太陽の温かな光が気持ちよく眠たくなつてしまつた時に大きな波がアルを襲いアルは何がおこつた野かを思い出した

「あー————つ」

誰もいない海上にアルの大声が響く、自分が自滅し荒波狂う海の中に放り出されたのを思い出し慌てて上体を起こそうと手を付こうとするが予想した場所に物は無く手は空中を滑り海面へと着水した。

「は?」

アルは自分の状態をやつと理解した、自分は漂流しており直前に唱えたレビュートの効果で辛うじて海の上にうかんでいるのだということを。

アルの顔は瞬く間に青くなつていぐ、自分が何処にいるのか何処に向かえば良いのか全くわからない状況で、食料も水も何も無い状況で海の上に一人きりというのは航海をした事が無いアルにもまずい状況であるのは十分すぎる程に理解できてしまった。

「冷静に、冷静にだ…冷静に、うん」

自分に言い聞かせるようにブツブツとつぶやく、端から見れば完全に不審者だった。

「と、とにかく。レビュート」

はつと我に返ったアルは自分にレビュートを掛けなおし海面の上に浮上した。

回りを見ても海、海、海の状況に絶望しかけたが思考を出来るだけ前向きにしていこうと深呼吸をし、此れから先の事を考え始める。が、こここの地理を知つていてる訳でもない自分が「チャ」「チャ」考えても無駄であるとの結論に達し開き直るアル。

「まっすぐ行けば、どつかに着くだろ」

基本安直なアルは安直な考え方で出来るだけまっすぐに空と海の境界線へと飛び始めた。

「（青い、青いよ）」

何処まで行つても青い海にアルは疲れを感じていた、最初のうちは見た事が無い程に青く透き通つた海と海に生きる見た事が無い生き物に目を輝かせ、弟達にも見せてやりたいな等と空の旅を楽しんでいたアルだったが、いつまでも同じ青が続いてくると流石につんざりしていくのは自然な事だった。

「あーーー、はらへつたーーー！」

アルの大きな独り言が空しく響く、もう何日も何も食べておらずそろそろ空腹の我慢が利かなくなっていた、もうここまで何度もレビデトを掛け直しつつ進んできたがこの世界に来てから何も口に入れていない、水はウォーターを唱えて自力でなんとかしていたが携帯食料やレーションも何も口に出来ていないので我慢出来なくなつた。一人大声を出してみたものの空腹を促進させただ悲しくなつてきただので、雲の形を楽しみながら進んでいった。

もう何日進んだだらうか、何回も遠田に嵐の曇らし雲が見えたが

嵐に直撃するのは幸運にも一回ですんだアル、しかしこの世界に来た時の面影は薄くなつてきていた、ひげは伸び髪の毛は潮風にさらされ続けばさぼさになり何日も食べ物を食べていないので日から覇氣は消え頬は瘦けてきていた。

アルはもう惰性で飛んでいるようなものだった、レビテトが解けない間しか浮いていられないで睡眠も満足にとれず食料もない、いつになつたら陸地に付けるのか明確な希望も無い、陸地に着いても食料にありつける確信もない。アルの頭にははただただまっすぐ飛んでいく事しかなくなつていた。

アルの田には陸地が遠目に見えていたが、ここまでくる間にも何回か陸地が見えたという事があったが其れはすべてアルに都合の良い幻でどんなに進んでもたどり着くことは出来無かった、今回もどうせ幻であるうとあきらめながらも少しの希望を持ちつつ陸地に向かつていった。

アルは興奮していた、幻だと思っていた町がもう田の前まで近づいてきている、ようやく食べ物にありつけると空を飛ぶスピードをあげるアルは鼻につく悪臭には気がついていなかつた・・・。

アルは呆然としながらゴミの山の前に佇んでいた、最初に海から町へと入ったのだが入つてすぐに警官らしき男性に呼び止められ即座に町を門から追い出されてしまった、普段なら突っかかる元気もあつたのだが、アルは声を出す事もあつくになっていたのだった。田の前のゴミ山を見てみると比較的町のすぐ近くのゴミ山のせいかゴミが新しい事に気がついた、中にはほとんど手がつけられないパン等が袋詰めになつて捨てられているのが確認できた、アルは其れを田にするや否や自分に呪文を掛けパンに向かつてダッシュした。

「ベイスト！」

アルは田にも見えない早さでパンの袋に向かつて飛びついた、周り

で他の獲物を狙っていた乞食達は遠くにいたアルが急に田の前にいるという現象に驚き手が止まってしまい略奪競争に負けてしまう者もいた。

そんな事もおかまいなしにアルはパンのはいつている袋をひん掴むとまた目にもつかない早さでその場を去った。今まで空腹のあまり気になつていなかつた悪臭が今になつて耐えられなくなつてしまつたのだ。

アルは力の限り走りゴミ山から離れようとするがゴミ山のあるところが思ったよりもずっと広い、もうあきらめてパンを食べようかと思っているときに目の前が開け緑生い茂る山の斜面が見えてきた、周りに僅かに残る乞食達がなぜあの山に入らないのかに少しばかり首を傾げながら山の斜面を駆け上つた。

駆けていたのでさほど氣にはなつていないがアルはこの山に乞食達が入りたがらない訳がわかつた、先ほどから見える獣達がベヒーモスかと思う程団体がでかいのだ

「（こりやあしじうがねえな…、一般人には危なすぎる何時食われるか気が気じやねえ。）

アルは一般人とはかけ離れた存在なので氣にも留めていなかつたが、食事の邪魔をされるのもうつとうしいので切り立つた崖の上に腰を下ろすと、袋を広げると、パンを齧掴みにするとほとんど噛まずに胃の中へと流し込んでいく、この世界初めての食事が残飯であつたがアルは其れが気にならない程パンが御馳走に思えた、このときアルの目尻にはうつすらと目尻に光る物がみえていた。

いつの間にか袋一杯のパンを食べ終わったアルは今後の事を考え始めた、又別の場所に向かつて旅を始めるのはどうにも微妙に思える、今度は何日かかるか分からぬ上に無事にたどり着けるか分からぬ、不確定要素がてんこ盛りな次の旅路に出るより、或る意味安定した食料の入手が出来るここにいた方がアルは良いような気がした、いざとなれば獣を狩つて腹の足しにすれば良いアルはそう考えていて、そのときアルの事を木陰から見ている小さな影にアルは満腹感で油断していたため気づく事が出来なかつた。

プロローグ6（後書き）

ちょっと短めか？

ようやく原作キャラの影が！

一ヶ月程このゴミ山の中で暮らしているとここにも独特的のルールとゴミユーンが存在しているのが分かった。ここでは力こそが全てであると考えられている節がある、そのため老人や女子供は立場が弱くなりがちで、海賊が幅を利かせている。

他にもあの膨大なゴミの山はゴア王国から排出されている事や、ゴア王国では王制が適応されており権力は王と貴族に集中している、そのため貴族達は選民思想が高く一般市民とは深い溝があり一部を除き不満は何時爆発してもおかしくない程高まっているらしい。

「（それにしても、気付かれていないと思っているんだろうな…）
はあ」

アルは思わずため息が漏れてしまう、最初は警戒しているのだろうと放つておいたが一向に監視をやめる気配はなく交代でアルがこの山にいる間だけ監視をしているらしい、気配から探るに一人で行動しているらしい何日か注意して探つてみたがある一定の規則でローテーションをくんでいた。

いい加減にらみ合いをするのも面倒になつてきており、食事の時くらい落ちついて食事をしたかったアルは攻勢に出る事にした。もしバックに海賊や最悪貴族がいた場合面倒になる事はわかつていた。最初の町では精神的に参つていて気付く暇がなかつたが落ち着いてみると、この世界には魔法という物が存在していない、人間というものは基本排他的な生き物なのでこの力がばれたりするととても面倒くさい事になるのはアルにはわかりきっていた。もし貴族等という下手に権力のある物や力を求める海賊や海軍にばれたりしたら

逃げ回る羽田になるのであまり口外して欲しくないのだ

「（片付けるか？）」

この「ミ山で弱みを握らせたが最後、骨までしゃぶられて捨てられている人間を何人も目の前にしていたアルは思考を戦場にいる時と同じように油断も容赦もない冷淡な思考に切り替えていた。

思い立つたが吉日、アルは計画を練り始める。片付けるのならば二人同時でなければ意味がない、一人でも残せば後でどうなるのか分からぬのだ。子供を殺すのは出来ればしたくないが殺すと判断すれば容赦はしない事を決めた。

「やりたくなえな」

星が輝く空を見上げアルは思わず本心を漏らしてしまった。

一人同時に片付けるのなら交代の時間を狙うしかない、つまり我慢比べの様なものだ、監視は山の中にいるときのみ行われていた。アルは山に残り続け子供が疲れ交代の時が最後のチャンスだと考えていた。

夜中から初めてもう水平線上に太陽の光が漏れ始めていたが未だ交代する気配がない。

「（ねばるな）」

行軍の時は何夜か徹夜するのが当たり前だったアルには此れくらい苦ではなかつたが子供の成長途中の未成熟な体力ではそろそろきつ

いとアルは踏んでいた、現に子供の気配は眠いのかフラフラと定まらなくなっている。

それから数時間経ち太陽が昇りきったときにチャンスは訪れた、子供の気配がもう一つ近づいて来るのがアルには分かった。子供が接触したとき勝機と見たアルは自分と保険として相手にも魔法を掛ける

「（ヘイスト！スロウ！）」

小声で呪文を唱えると子供たちの背後に回ると今来た子供の首を掴み監視をしていた子供の呪文を解く

「デスペル」

帽子をかぶった子供は慌てた様子でアルの方へ振り返りつつ距離をとるが、自分の相方が捕まっていると分かると少し離れた所で鉄パイプを握りしめながらアルを鋭い目つきで睨みながら警戒していた。

少しの間睨み合いが続くが、アルは微塵も油断をせず自分が首を掴んでいる子供と目の前の前の子供に注意を払いつつ口を開いた。

第一章　一話（後書き）

やつといプロローグから脱出ー。

第一章　一話

黒いクセツ毛の男の子の首を掴んだまま帽子の男の子に問い合わせる

「お前、名前はなんだ」

アルの淡々とした問いかけにひるむが震える声で答える

「だ、誰がお前なんかに！」

アルは冷たい目で其れを一瞥すると片手に掴んでいる首に力を加える。

「くあつ」

苦しげな声をあげ抵抗を強めるがだんだんと抵抗が弱まっていく

「Hース！」

悲鳴の様な叫びがあがる

「Hー…スだと？」

アルは思わず手から力が抜けてしまう、別の世界に置いてきた弟と同じ名前に動搖してしまい隙が生まれる。

エースと呼ばれた少年はここが好機とばかりにアルの手から逃れ、アルを鋭い目つきで睨みつけ憎しみを込めた声で叫ぶ。

「お前！俺を殺しに来たんだろ！わざとやれよ！」

アルはエースの言つている事が理解出来ずに眉を潜める、こんなにも小さな少年に殺せと言われる様な心当たりは無かつた。

「サボには、サボには手を出すな！俺を殺しに来たんだろうが！」

帽子を被つたサボと呼ばれた少年を後ろ手に庇いながらアルを睨みつける視線は揺るがない。

「…お前を殺す意味は俺にはない。そもそもお前が誰なのか知らん。

」

アルはエースに答えるが警戒が解かれる事はない

「嘘を言つな！あいつが俺の父親だから殺しに来たんだろう！世界政府の手先の癖に！」

エースの声は段々と大きくなつていく。

「あいつ？」

アルは訝しげな表情を浮かべる。このときこの状況を一步引いた心境で見ていたサボはこの男が嘘をついていない気がした

「（エース）」

小声で其の旨をエースに伝える、エースは眉を潜め困惑した表情でアルに向き直り手についていた鉄パイプの先端をアルから地面へと下ろした。

エースが冷静になつたところでアルは気になつていた事を尋ねる

「お前達は誰かの命令で俺を監視するよつに言われたのか？」

もし此れを肯定された場合、背後関係を吐かせた後命を絶たなければならなかつた。

「……いや、町から出て来たのが見えて。それからゴボル山に入ったから、俺やサボを狙つてるのかと思つて警戒してた。」

未だ警戒を完全に解いていないがエースは素直に質問に答えた。

「次の質問だ、お前らはここで一人で暮らしてるのか？」

アルが質問を投げかける。

「いや、エースの爺さんが山賊に俺たちを世話をよつて頼んで、そこに寝泊まりさせてもらつてる。」

今度はサボが答える。

「じゃあ、最後の質問だ。……お前の言う父親、あいつ、とは誰だ？」

アルは思わず厳しい声が出てしまう

「…………言えない

時間を置いてからエースは苦しげに答える

「そうか……」

アルはそう呟いてエース達から視線を外す

「もう行つていいぞ」

二人に興味無さげな声を掛けるとアルはきびすを返し森の中へと姿を消した。

一人は慌てて男の後を追うが姿を捉えられず不思議そうな表情で顔を見合わせグレイターミナルへと続く道を進み始めた。

第一章 二話

エースとサボはアルと分かれたあと行っていた強奪行為により少々まずい状況に陥っていた。強奪を行った海賊達に宝を盗んだところを目撃されてしまったのだ。

「はあはあ」

エースとサボは必死になつてコボル山に向かつて走っていた。

「待ちやがれ！ ガキども！」

柄の悪い男達の声が後ろから飛んでくる。エース達は自分たちの庭の様なコボル山に逃げ切ったらとりあえず命の無事は一時確保する事が出来たが、大人と子供の覆しがたい体格の差によつて刻一刻と距離は詰められていった。

「捕まえたぞ！ ガキ！」

あと僅かといつてこりで、男達にエースと比べて体力の少ないサボは捕まつてしまい首根っこを掴まれる

「お宝の場所を吐いたら助けてやつても良いぞ」

男達の中で一際偉そうなひげを生やした男が未だ抵抗の意思を無くそうとしていないエースに向かつて脅しを掛ける。男はサボの首を片手に持つサーベルの腹で撫である。

「くづ

エースはこんなところで大事な相棒の命を失う訳にはいかなかつた。

「宝を隠している場所を教える……だからサボを離しやがれ！」

エースは悔し氣に唇を噛み男達に自分たちが集めた宝の場所を吐く決心をした。

「おふお、中々に宝があるな！」

海賊の船長は興奮した様子でエースに皮肉を込めた笑みを顔に貼付けて話しかける。その声をエースは無視したが船長は其れが憎たらしくみえた

「粋がつてゐんじゃねえよ！」

エースの頬を握りこぶしで力一杯殴りつける。

「ぐつ」

エースは体が壁に叩き付けられつめき声を漏らす

「野郎どもーお宝を運び出したらガキどもに大人の怖さつて奴を教

えて差し上げる。」

船長の男はげびた笑い声を上げて宝を貯めた貯蔵庫を後にした

「サボには手を出さねえ約束だつたじゃねえか！」

エースはその背中に憎々し氣に怒声を上げるが男には聞こえていないのかそのまま姿を消し、エース達の周りにはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべた男達が立ち囲んでいた。

エース達は男達の暴行により体の至る所に痣が出来痣の無いところを探す方が難しい程だった。サボは途中で意識を失ってしまい、エースはサボを自分の体の下に置き必死になつて庇つていた。

一方で、男達は悲鳴一つあげない子供にいらだつていた、うめき声を上げても泣き叫び命乞いをしないこの小さな子供は男達の神経を逆撫でするには十分だった。

第一章 四話

男達が暴行を初めて数十分、エース達には数時間にも及ぶような時間はエースがうめき声がしなくなつて終わりを迎えた。

「ぐ、此れぐらいにしてやるー！」

男達によって僅かにも動かなくなつたエースとサボを廃屋の中に残して男達は去つて行つた。

男達が去つてから暫く時間が経ちサボは目が覚めた

「うつ

体中がズキズキと痛み思わずうめき声を漏らすが少しでも体を動かすとその度に体中に鈍痛が走つた。思わず顔を顰めるが自分よりも長く意識を保つていたであるうエースの姿が見えないのが気になつた。

サボはあたりを見渡し廃屋の隅の影に隠れるように打ち捨てられているエースを

見て思わず息を呑んだ、エースの体は見渡すところ全てが内出血により青くなつており服はがエースの血に赤く染まり、流れた血がどう黒く固まつていた。

「ひでえ」

思わず涙声になつてしまつ、このまままともな治療を受けられなかつた場合エースの命は消える事になつてしまつだらう。今まで一年程だがともに相棒として過いして来たサボにはエースが死んでしまうかもしれないという事実は受け入れがたいものだつた。

廃屋の入り口に影が差し廃屋の中が暗くなる、男達がとどめを刺しに来たといつ可能性が頭をよぎり、サボは泣きながら武器をとつた、たとえ助からずとも自分が敵わなかろうと親友を汚したく無かつた。

「だ、だれだ！ 出で行け！ 僕が相手をしてやる！」

サボは思わず声が震えてしまつが、体は前に前に進みエースの体を後ろに庇つっていた。

「ああん？」

片手で頭を搔く無精髭に覆われたその顔にサボは見覚えがあつた、他の頼りない大人達よりも少しはましかもしれないと藁にもすがる思いで助けを求める。

「た、助けてくれ！ エースが！ エースが…」

最後の方には目から涙を流し声を震わせるその様子にただ事ではないと感じたアルは廃屋の中をよく観察する

「なつ」

サボの後ろには瀕死の様相の少年が弱々しく呼吸をしており思わず先田との違いに驚きの声を漏らしてしまつ。

「助けてくれよー死んじまつよー」

サボの悲鳴の様な声とエースの弱々しい呼吸音が廃屋の中で耳につく

「ちつ」

アルは胸ぐその悪さに思わず舌づちをするが、其れを勘違いしたのかこの状況に耐えられなくなつたのかサボは嗚咽を漏らすだけとなつた。

「ち、ちほ・・・・そんなやつに・・たのまなくていい、 、 おれ
はだいじょうぶ、 だ」

サボの声に田を覚ましたのかエースは田を覚ますが田はサボを見ずに虚空を見つめており呂律の回らない言葉が口から出る。そのエースの様子と残して来た弟達が被つて見え、アルは言いようの無い苛立を感じエースの側へと寄ると呪文を唱えていた。

ほわりとアルの手に優し気な緑光が灯るとその光は段々と大きく強くなつていいく、廃屋の内部を照らし出す程に大きくなると光の灯つた右手で空を切り、静かだが力強く低い声で呪文を紡ぐ

「ケアルガ」

アルの手に灯る緑光は廃屋の中に弾け、エースとサボの体に降り注いでいった。

空に縁光が溶けていく幻想的な光景にサボは気付かないうちにぼんやりしていた。

「う、ん」

エースが声をあげてゆっくりと起き上がりサボは我にかかる

「エース！大丈夫なのか？」

サボは急に起き上がったエースに驚いたが顔色が随分とましになつている事に安堵した。

エースはさつきまでの死に体だつた自分の体調が万全と言つても差し支えのない現状に顔には出さないが驚いていた。

自分の手を握り体の調子を確かめていると、アルの苛立つた声が聞こえた

「なんであんな事をした、手を出したら危ねえ事くらい分かるだろう」

アルはこの子供達の命を投げ捨てる無謀さや向こう見ずな態度にイララしていた。

サボはアルの睨みつける視線にバツが悪くなり俯いてしまうが、エースはキッとアルを睨むと田の中に確固とした決意の炎を灯しアルに答えた

「夢のためだ！」

エースの声に触発されたのかサボもアルを見上げる。その一対の瞳にアルは思わず笑みがこぼれてしまう。あの世界で弟達を守るという生き甲斐しか見つけられず、惰性で生きていた自分とは違い幼いながらに夢へ向かい走るその姿はアルには眩しく、この暴力のまかり通る世界において尊いものに見えた。

厳しい声の調子から急に優し気なまなざしを向けてくるアルにエースは戸惑っていた、そこにアルは声を掛ける

「お前達の夢は知らんがそこまで一生懸命になれるのだからお前達には大切な事なのだろう、だがだからといって命を投げ捨てて良いとこう訳ではない。

そこでだ、俺は戦う訳にはいかねえがお前達の夢が叶うまでお前らを守つてやる」「

声は相変わらず厳しい声だったがその中に自分たちを気遣うものが混じっているが分かつたので一人は黙っていたがアルの投げかけた提案があまりにも急な事だったので俯かせていた顔を勢い良くあげると、そこにはアルが不適な笑みを浮かべながら腕をくみこちらの答えを待っていた。

「・・・・・たのむ」

暫く沈黙が続いたが小さな蚊の鳴くような声でサボは頭を下げた、エースはその様子を信じられない目で見つめ少し怒りのこもった声でサボに詰め寄った

「サボ！」

エースの言葉には言葉に出さないが言外になぜこの男を受け入れたのか責める響きが含まれていた。

エースの大きな声にひるみかけるがサボは負けじとエースを睨む。

「今日は、今日は大丈夫だつたけど！また同じ様な事が無いとは言
い切れない！今度はどつちかが死んじまうかもしない、そんな事
が起きないためにも俺たちには、保護者が必要なんだ。

確かにこいつの印象は良くはないけどあの町の大人達よりましだし、
嘘についてない事もわかるんだ。」

サボは先ほどまでの不安を思い出し、涙目になりつつもエースに自
分の考えを説く。サボのここまで不安そうな表情は初めて見たため
エースは自分がどれほどひどい状態だったのかわかり、アルへと向
き直る。

「…………よろしく」

アルを睨みつけながらほんと聞こえない様な声でエースは小さく
頭をさげた。

第一章 六話

エース達はこの男と行動を共にしていくうちに分かつたことと、不思議な事があった。アルの食生活は自分たちと大して変わらないが、一緒に獲物を捕るときに何処からかサーベルを取り出したがその腕は凄惨なものだつた‥。

「おい！来たぞ」

エースが物陰からアルに小声で呼びかける
アルは了解とばかりに頷くと片手にサーベルをエースには見えない
ように具現化し、獲物が予定位置に辿り着くのを待つ。

「（今だ！）」

エースがアルに田で合図を送るとアルは草影から飛び出し獣に切り掛かる

「はあ――！」

力強い雄叫びをあげサーベルを振り上げ斬りつけた

かのように見えた。

サーべルを振り下ろし叩き斬ったかに見えたとき真ん中でサーべルは折れアルの後ろに飛んでいく、エース達とアルの間に気まずい沈黙がおりる。

沈黙がおりた森の中アルが全速力でエース達の方に逃げてくる、アルの後ろには怒り狂つた獣がこちらに向かつて突進して来ておりエースとサボは真っ青な顔になり獣に背を向けグレイターミナルに向かつて逃げ出した…。

エース達はアルにもう一度と狩りをさせない事を決めていたが、不思議な事にアルはエース達の知らないうちに獣を狩つてくる事があつた、罠に掛けたのかとも最初は思つていたがそのような痕跡も無いのでサボとエースは不思議に思つていた。

「そりいえば…お前らが世話になつてゐるといつ山賊に顔見せした方がいいか？」

アルがふとした拍子に零した言葉にエースはうげえと顔を歪める

「ダダンの奴のところに行くのかよ」

エースはアルをダダンのところに連れて行くを済る。

「?なんか俺に見られちゃ拙いものでもあるのか?」

アルは首を傾げて一人に聞くがサボとエースは不安げに顔を見合わせる

「その・・・ダダンは、山賊なんだよ

サボはエースが不機嫌そうにそっぽを向いてるのでサボが仕方が無さそうにアルに説明する。

アルはサボの説明に片眉をあげ、エースはどんどんと不機嫌になつていく、不機嫌になつた一人に挟まれて居心地悪そうに態勢をなおす。

「はあ~」

頭をボリボリと搔き、溜め息を吐いて悪くなりかけた空気を元に戻す

「んじゃ、そのダダンとか言つ奴のところに行くぞ」

アルはサボとエースを立たせるとコボル山にあると言つ山賊達のアジトに向かつて嫌々ながらも山を登り始めた。

第一章 六話（後書き）

お知らせ

此れから一週間くらい補講のおかげで少々忙しくなるので更新が遅れるかもしれません。

第一章 十話（前書き）

復活！

第一章 七話

エース達の保護者であるダダン達との会合は失敗に終わったと言つてよかつた。アルはエース達の保護者に当たるのだからと朱雀時代に使つていた赤い礼服に白いマントを装着し出来る限りの礼を尽くす為身だしなみも整えたのだが、ダダン達山賊一家はアルの事を道楽貴族かなにかと勘違いしたのか表面では懲勸な態度を取り揉み手をする笑顔の裏ではさつさと帰れという思いが、後ろで見ていたサボにも見え透いている様な態度を取つたのだ。其れを見てアルは服装を正してサボとエースと合流したときに見せた二人の何とも言えない表情はこの様になる事を予見していたのだと気が付いた、実際には一人はアルの礼装の普段との変わり様に驚き言葉に出来なかつただけなのだがアルはそんな事にも気付かず後で一人になぜ早く言わなかつたのか問い合わせただそうと心の中で決心していた。

そんな事があつて、ダダンの態度に腹を据えかねたアルが額をまるでマスクメロンの様に血管を浮き出させつつも笑顔で小屋を退出してから山道を氣まず気によつてはいるがアル以外の二人の顔は完全に血の氣が引けており真つ青だつた。

会話も無く無視の声が耳につく山道で堪えきれずアルは溜め息をついた。

「ふー、俺は一度と彼奴らには会わん。」

どこか疲れきつた声色だったがその中に怒りの色が含まれていないと事にサボは安堵した

「そんなんにムカついたなら殴つちまえば良いだろ。」

損案サボの気持ちも考えずに隣にいたエースが爆弾を投げつける

「そんな事言つても、あんな奴らでもお前達の世話を任されてるん
だろ…」

何処か困った様に頬を指で搔きながらアルは答えた

「…別にお前でも良いんじゃねえの」

うつすらと頬を染めながらエースはそっぽを向きながらもアルに言う。隣にいたサボはエースのアルを信じる発言を驚愕を隠そうともせず表情に出しながら聞くが、少し考えてみるとエースに対し悪意を持たずに子供として扱ってくれた年上の人はあるハチャメチャな海軍の爺さんを除いて初めてだと思い当たるしかもある爺さんの愛情表現はハチャメチャ過ぎて本当はエースを殺そうと思っているのではないかと考えを巡らせてしまう程だ。

一瞬信じられないものを聞いた様な表情でエースの方を振り返るが数瞬後には嬉しそうな顔でエースの頭をガシガシと撫でる、エースもそっぽを向きつつも満更ではない表情で其れを甘受するがサボの何とも言えない表情に居たたまれなくなつたのか手を払い除けようとするがアルはエースの頭をガシガシと強引に撫で付けていた。

アルはあのダダン一家訪問時にエースに認められた事が余程嬉しいのか最初は照れて顔を真っ赤にしていたエースも溜め息を吐く様

なはしゃぎ様を見せていた。アルは出来るだけ落ち着こうとしているのは傍目から見ても分かるのだが、行動の端々に歓喜がにじみ出でおりサボ達は最近鬱陶しくて仕方が無かつた。

そんな日常の中でアルは一人を呼びつけ真剣な表情で一人に向かい合った

「二人の食事の為にも働こうと思つー。」

アルの真剣な表情と二人の何とも言えない顔が三人の間に微妙な沈黙を醸し出していた。

第一章 七話（後書き）

大学の方がなんとか一段落したので執筆を再開

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1539z/>

0 1

2012年1月12日18時48分発行